

「後ろからくるまー。」

と、前を走るほく達に声をかける兄。そうかと思えば、

「ここに段差があるからねー。」

と、母が振り返って声を張り上げる。みんなの額には汗が流れ、背中には大きな世界地図が出来ている。それでも、足に力を入れてギョギョッとこぐ度に感じる心地好い風は、何ともそう快だ。近頃、我が家では、『エコドライブ』と称して、よく自転車で出かける。こんなふうには、家族みんなと自転車で乗って出かける日があるなんて、数年前のほくには考えられなかった。

ほくは、超未熟児で生まれたため、呼吸器のお世話になって生活する日が続いた。けれども、そのままでは病院生活しか送れないため、家族と一緒に過ごせるようにと、気管切開の手術を受ける事になった。そして、退院。でも、それから母は、ほくに付きっきりの毎日。気管切開をしているため、常に吸引（医療行為）が必要で、買い物や兄の幼稚園の送り迎えですら大変だったと聞いている。入院も、何度も繰り返した。その時も、母は必ずほくの側で子ども用の小さなベッドに身体を丸めて一緒に寝てくれた。障がい者センターや幼稚園、小学校へ通う時も、いつも母とほくの命を守る吸引器がセットとなって、行動する日々だった。

それが、今年の夏、ほくの喉に入れているチューブを抜くための移植手術の話が持ち上がった。それまで何度も手術は受けてきたけれど、この手術には父も母も慎重で、母は何度も何度も担当の先生と話し合っていた。ほくは、声が出せるようになるんだったら、という思いで、

「いいよ。」

と、簡単に言っただけだけれど、両親にとっては覚悟を決めての決断だった、という事を手術後に聞いた。

それから一年、ほくがマラソンランナーならば、母が伴走者である事には変わりはない。ほくの通院や訓練に付き添い、いつもほくを見守ってくれている。ただ、以前はいつも母の肩に重く下げられていた吸引器がなくなり少しは楽になっただろうか。

ほくは今、言葉を声に出して言えるようになるための言語訓練中だ。みんなは、平気で鼻や口で息を吸っては吐き、声を出してしゃべる。どうしたらそんな風に自然に発声出来るのか、ほくには不思議だ。ほくも、みんなと同じように鼻と口で呼吸したい。けれども、自分の身体なのにほくの意思を無視して、チューブを入れていた穴から空気が出入りしてしまう。だから、まだ言葉が声にならない。だけど、待っていて、お母さん。いつか、きっと、

「いつも、ありがとう。」

つて言葉を、聞かせるからね。